

ずれば内證の深勝ある事を顯すもの也。而して今相承、付囑を論ずるに於ては、彼の印度出現垂迹を釋迦牟尼佛を根據とするには非ずして久遠本佛を以てす。壽量品に云く『皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿辱多羅三藐三菩提然云々』又云く説我小出家得阿辱多羅三藐三菩提然我實成佛已來久遠若斯但以方便教化衆生令入佛道作是説』と説示し、彼の印度出現の佛は、垂迹示現にして其の實は五百塵點久遠の本佛あることを顯示せられたり。されば付囑相承もそれが如くならざるべからず。然りと雖も迹化の付囑は開顯後にあるも所付の法體は全く顯本已前の迹門に同じくして、此の法本と像法の時宜に適ひ當時の群類を救濟して本化所付は壽量文底の大事本門肝心にして末法に於て閻浮に廣布せんことを示され、末法の衆生救濟の爲めにありしものにして、而して付囑相承たるや宗旨の生命を持續せしむべきの大綱をなすもの也。妙宗の學人之を精究せずんば本佛の本懷を知らず、故に吾人は不肖を顧みず本化

の末流として相承と付囑との關係を論ずる所以也
 本論に至りて付囑の意義を明し、尙總別の起盡並に本化迹化の弘通の状態を明にし、次に相承の意義を明し、而して本化迹化二様相承の形態を明し、更に進んでは相承と付囑との交渉を述べ以つて其の根據を取捨し、最後に吾相承付囑に於ける私見を述べて以つて結論とする也(つゞく)

秘論

山岡義哲

第一章 宗旨論

本論

第二章 本門本尊

第一項 本尊名義

第二項 曼荼羅相

第三項 本尊本体

イ 教門本尊
 ロ 視門本尊

第三章 本門題目

第一項 五字内容

第二項 五字名義

第四章 本門戒檀

第一項 戒 檀

第二項 戒 法

第五章 結 論

第一項 本尊ト吾人ノ關係

第一章 宗旨論

余今淺見をも厭はずして諸書に依り宗旨について論せんとす。

宗旨とは一宗の歸趨する所にして、即本尊、題目、戒檀の三秘是なり。先づ始めに三秘の体は如何なる者なるかを辨せば、即本尊は妙定をもつて体となし、題目は妙惠を以て体となし、戒檀は妙戒を以て体とあす。而して定とは決定を以て義となす。『御義』に曰く、本尊とは法華經の行者の一身の當体あり云々と。如斯本門の本尊は行者の即

成を決定せしむるものにして、是れを本門事の圓定とあすべきあり。經に曰く『於我滅度後應受持此教是人於佛道決定無有疑云々』と、此の文圓定の出據にあらずや。

惠とは智惠の義にして、『御義』に智惠とは一心の三智なり。乃至三智の体は南無妙法蓮華經也、今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉るを智惠とは云ふなり。云々又曰く三世の諸佛の智惠を一返の題目に受持する是は慧なり云々依て諸佛の智惠は即ち題目ある事明かあり。是を本門事の圓惠となす。

戒とは防非止惡の義にして、『御義』に曰く、權教は無得道、法華經は眞實と修行する是は戒なり。云々妙法の功力よく三道を轉じて即三徳とあすあり。非の防くべきあく、惡も亦止むべきなく、只正直に方便を捨て、且つ信じ持つを本門事の圓戒と名く。經に曰く、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然、如是之人、諸佛所歎、是則勇猛、是則精進、是名持戒云々と。以上三學三秘を略述すと雖も、題目とは捲舒の異りあるのみにして、即題目論舒

ふれば三秘とあり、三秘を捲けば題目となるあり。三秘の出據を經文に求むれば正しく壽量品の然我實成佛已來の文により、本尊抄には此の文を引き具に本尊と題目とを示せり。

第二章 本門の本尊

今本尊に付いて略述せんに、本尊とは行者信仰の對象一宗の大事にして、是れを知らずんば其歸依所を失ひ宗旨に迷ふ、依て今略して左の三項となして論せん。

一ニハ本尊ノ名義ヲ辨シ

二ニハ其ノ相ヲ論シ

三ニハ明本尊本体

第一項 辨本尊名義

名義を辯ずるに今主客兩重を立て、始めに客觀に約して論じ、次に主觀に約して論せんと欲す、先づ客觀に約すれば一には本尊とは根本尊崇の義にして、行者是れを修行の根本とし、所体として最も尊崇する故に本尊とすと云ふ。尊崇する所の三

實多しと雖も其中に根本とする所あり故に根本尊崇の義とす。

二には本來尊重の義とす。今の本尊とせらるゝ所のものは無始より法爾として天然最勝の尊重の法なるが故に本來尊重の義となす。

三には本有尊形の義あり、曼荼羅の全体是れ久遠の尊形あり。又一々の諸尊本時以來常住の尊形なり、故に本有尊形の義とす。次に曼荼羅とは一には諸佛集と云ひ本迹の諸佛三身の体用一所に集在するが故あり。二には功德集と云ひて本佛所有の一切の因行果德集會して一所に存するが故なり。三には淨檀と云ひ、諸の三寶諸天尊普く勸請して、一所に安置する清淨の檀臺あるが故あり。四には輪圓具足十界三千の諸の妙法圓滿具足して一所に存在するが故に云ふあり。以上客觀的に名義を辨ずる事斯の如し。

主觀的に名義を明さば、本尊は是れ行者自身の當体滿行滿徳の根本にして、無作三身の覺体妙法蓮華の妙力ある事を開示せしむる軌鏡あれば、根

本尊崇の義を有す、又本尊は行者一色心の當体十方に融通し、三世に周徧して融妙圓滿の法体にして、本來尊重なる事を開示せしむる軌鏡なれば、本來尊重の義を有す、亦本尊は行者の當体悉く是れ久遠の四大本時の六塵の所成なれば、一体圓融して本有の尊形ある事を開示せしむる軌鏡あり。故に本有尊形の義を有す、次に曼荼羅は行者自身全く久成の佛体にして十方三世の諸佛其体内に來集せしむる事を顯す者なれば、是れを諸佛集と云ふ。又曼荼羅は行者妙法蓮華經を受持する時本佛所有の因行果徳の一刹那中に集聚して、徧法界の功徳を顯現せしむる者なれば是れを功德聚と云ふ。又曼荼羅は行者所住の當所淨妙なる不思議境にして三千の莊嚴無盡に緣起する寶幢ある事を顯す者なれば是れを淨幢と云ふ。又曼荼羅は行者の一色心に天地法界の萬法を攝盡して互に圓滿具足せる事を顯す者なれば是れを輪圓具足と云ふあり。

第二一項 曼荼羅の相

曼荼羅の相を辯ずるに分て六となす。一には法

界自爾、曼荼羅なり、森羅万象此の中に周師し行住座臥すと觀する時は法界は一の大曼荼羅となる。此れを一幅の紙上に寫したる道場莊嚴の曼荼羅なり。二には靈山顯現の曼荼羅なり、釋尊法華を説き給ふ時、寶塔虛空に現し、釋迦多寶塔中に並坐し比丘等の四衆並に天龍等の八部に到るまで悉く壽量の佛慧を信解し、福智圓滿の儀式を整へたる大會を見る、此の虛空會上顯現の形相を一紙上に寫したる本尊あり。三には道場莊嚴の曼荼羅なり、是れ即ち佛滅後二千二百二十餘年間未曾有の大曼荼羅にして一紙上に十界常住の形相を示顯す、此れ顯には虛空會上の儀相冥には法界自爾の形容を示し、正しくは行者觀心の信解を發揚する末代當機の大軌範なり。四には行者心具の曼荼羅なり。行者の一心中に十界三千の諸法を具足するが故に行者の一心宛然として是れ曼荼羅の真相とある。之を行者心具の曼荼羅と云ふ、五には念々緣起の曼荼羅なり行者念々の起心に三千含融して起る下思議の法をさして念々緣起の曼荼羅とす。六に

は依正各具の曼荼羅なり。依正互に他を具足して一種子中に諸の技葉花果を具足するが如き不思議の法なるを依正各具の曼荼羅と云ふなり、行者一度曼荼羅を禮拜する時は、一念の當初能く是等六種の曼荼羅を供養する事を得るなり。(以下次號)

興師身延離山に付て

望 月 本 啓

古來興師身延離山に付て諸多の説ありと雖も、其れ等は暫く置き、或派の師波木井公の謗法なるが故ありと云ふものに對し、少しく自己の信ずる所を述べむとす。

御書に曰く『同十七日波木井の郷へ着きぬ波木井殿に對面せしかば大いに悦び今生は實長身の及ばん程はみつぎ奉るべし後生をば上人助け給へと契りし事は只事とも覺へず偏へに慈父悲母の波木井殿の身に入りかはり日蓮を哀み給ふか』と。波木井殿いかで此の誓を破り給ふべき、又曰く『次

郎殿等の御公達親の仰せと申し我が心に入れてはします事なれば乃至一人も疎略の義なし』依て知んぬ、親子心に入れて御供養申せし事を。若し更に之れを疑ふ者は須く我執を捨て、考ふべし、宗祖其の始め御座所御選定に當り、諸方有力ある信徒の招待にも應じ給はず、特に此の地を撰み給ひし事を。若し波木井公の謗法は後年なるが故にと云はゞ、末法唱導師本化上行菩薩として九ヶ年の長き間斯くの如き大事を知らずして過したりと云ふか、強いて之れを云はゞ蒙古豫言も妄語となるべし。一丈の堀を越へざる者二丈三丈の堀を超ゆべからざるが故なり。見よ、波木井殿御書には、『此人は無邊行菩薩の再誕にてやれはすらん』と又『此の山は天竺の靈山日域の比枝山にも勝れたり』と遊ばされたるを。無邊行菩薩何ぞ謗法をおされんや。地頭若し謗法からば何ぞ勝れたりと宣せ給ふや。又御書に曰く『靈山の教主釋迦寶淨世界の多寶如來十方分身の諸佛本化の太士迹化の菩薩梵釋龍神十羅刹女も定めて此の砌りに御座すら